

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：32699

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25560308

研究課題名(和文)近代日本における女性スポーツ教育にみるグローバル化への先駆的展開

研究課題名(英文)Pioneering Developments toward Globalization Found in Female Sport Education in Modern Japan

研究代表者

荒井 啓子(Arai, Keiko)

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：50082938

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代日本において欧米からの先進的な教育に影響を受けつつ女性スポーツ教育を牽引する役割を担ったと考えられる華族女学校の体育・スポーツ教育の事例を検証し、今日のグローバル化に繋がる女性のスポーツ文化の先駆的展開を明らかにすることを目的とした。そのために、第4代校長の細川潤次郎の教育観と具体的な教育内容をアーカイブズ資料から読み解いた。また、津田梅子の留学先であった米国プリンマー大学と下田歌子が視察した英国チェルトナム・レディーズ・カレッジの調査を実施し、欧米のモデルが近代日本の女性スポーツ教育にどのような影響をもたらし、現代のグローバル化とどのように関わって来たかを模索した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to examine the physical and sport education at the Peeresses' School, which is thought to have played a leading role for female sport education under the influence of American and European innovative education in modern Japan, and to explain the pioneering developments of female sport culture which are linked to today's globalization. For this purpose the research was done by investigating the archive documents concerning the educational view by Junjiro Hosokawa, the fourth principal of the school. In addition to this, the information was retrieved about Bryn Mawr College in America, where Umeko Tsuda studied and Cheltenham Ladies' College in England, which Utako Shimoda visited for her researches. In sum, this study focuses on the influences American and European educational models had on the female sport education in modern Japan and their relation to the contemporary globalization.

研究分野：スポーツ人類学

キーワード：近代日本 女性スポーツ教育 先駆的展開 華族女学校 細川潤次郎 下田歌子 津田梅子 グローバル化

1. 研究開始当初の背景

近代日本における女性の体操や軽度の身体運動は女学校を中心に明治期から徐々にみられるようになるが、欧米から移入されたゴルフ・テニス・乗馬などの「近代スポーツ」は、ごく限られた階層（華族や士族、または外交官等の政府に関わる人々）にのみ、その機会がもたらされていた。学校教育の場においても同様であり、特別な立場にある華族の子女が学ぶ華族女学校（1885年開校）は女性の体育・スポーツ教育のパイオニアであったと言える。1903（明治36）年、「高等女学校教授要目」が制定され高等女学校における体育振興が機能し始めたと言われるが、その時すでに華族女学校では第4代校長であった細川潤次郎が体育と徳育を重視する教育方針のもと、「体操」の授業時間を増やすとともに、1894（明治27）年11月、第1回運動会を開催していた。さらには遠足や校外見学などの課外の身体運動を含むレクリエーション活動に力を入れ、啓蒙的・先進的なスポーツ教育を展開した。また、開校当初から津田梅子をはじめとして欧米において教育を受けた教員が多数在籍していた。津田は後に女子英学塾（現・津田塾大学）を創設し、all-round women（全人的な女性の育成）を建学の精神に掲げ、その教育理念が、運動会に当たる「ブレイデー」をはじめとする身体教育行事や健康教育の中に歴代にわたり継承されてきたことは特筆すべきことである。

このような体育・スポーツの啓蒙的な活動や教育内容と、欧米留学や視察の経験をもちその影響を少なからず受けている教員による学校運営、そして華族という特殊で特権的な立場の子女を教育する学校が、近代における新たな理想を掲げて学校文化に携わったであろうということは容易に想像できる。本研究は、先に述べたように、華族女学校が当時の先駆的な教育内容を示しているとの仮説に立脚する。その上で、現代の女性スポー

ツ文化の国際的な拡がりの源流を近代の女子教育の実際に探ることを試みた。

2. 研究の目的

上記の研究課題を受けて、本研究では、近代日本において欧米からの文化をいち早く受容できた官立の女子教育機関であった華族女学校と津田梅子が後に創設する女子英学塾に着目し、体育及びスポーツ教育がどのように行われていたかを明らかにし、さらにその教育に携わった人々の教育理念やそれに影響を与えたと考えられる英米の女子大学等の教育内容を現地調査によって検証することを目的とした。

具体的には以下の3点について検証し、そのうえで、先駆的な女性観・文化観・教育観を読み解き、現代における女性スポーツのグローバル化との関わりを導きたいと考えた。（主に研究代表者）

（1）主に華族女学校（1885～1905）における種々の学校行事（運動会・課外活動等）及び体育・スポーツ教育の内容を精査した。

（2）華族女学校の先進的女子教育に関わった人々（細川潤次郎、下田歌子ら）の教育理念を資料により読み解き、それぞれの留学先や視察先であると同時に女性スポーツ教育を牽引してきた事例として欧米の女子大学を調査した。

（主に研究分担者）

（3）米国東部のプリンマー大学（津田梅子の留学先）及びウェルズリー大学出身の女性リーダーが、州立大学の女性スポーツ教育を牽引した事例を調査し、全米の女性スポーツ教育の拡大が、津田塾大学の健康/身体/レクリエーション教育の構築に与えた女性リーダーの先駆的役割を明らかにした。

3. 研究の方法

研究の目的に照らして、以下の2点を中心的な研究方法とした。先行研究では未着手であった資料の検証と分析、近代日本のスポーツ教育に影響を与えたであろう英米の女子教育機関への現地調査、である。

について、研究代表者は、主に学習院アーカイブズに所蔵されている下記資料によって、運動会の実施状況とその社会的影響とともに、第4代校長であった細川潤次郎及び学監として校長を補佐した下田歌子の教育観を読み解いた。参照した主な資料は以下の通りである。1)『女教一斑』第1編・第2編、華族女学校(1896・97.)、2)『華族女学校規則』(「例規録 第5号 明治22年」)女子学習院(1889)、3)『式事録』、華族女学校(1896～1905)、4)『学習院女子中等科 女子高等科 125年史』、学習院女子中等科高等科(編)(2010)、5)『学習院百年史第一編』学習院百年史編纂委員会(編)学校法人学習院(1981)、6)『学習院女學部沿革志稿5・抄録』女子學習院(1927)(宮内古文書館所蔵)、7)『女子學習院五十年史』女子學習院(1935)、8)『婦人画報』第1巻第1号、近時画報社(1905)。

研究分担者は、津田梅子の女子英学塾創立の精神について、以下の資料を参照した。1)『津田塾大学100周年史』(2003)、2)飯野正子他編著『津田梅子を支えた人びと』(2000)、3)津田塾大学編『津田梅子文書』(1984改訂)その他、学内外の関連書籍、及び歴史資料。

について、研究代表者は、英国のヒューズ・ホール(Hughes Hall)とチェルトナム・レディーズ・カレッジ(Cheltenham Ladies' College)を訪問し、アーカイブズ所蔵の資料を入手するとともに聞き取り調査を実施した。研究分担者は、米国東部の私立のプリンマー大学(Bryn Mawr College)、及び州立のノースカロライナ大学(UNCG)の現地調査を実施し、大学が所蔵する学内文書、書簡、写真資料の読み解き、及び聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

(1)平成25年度においては、研究代表者は、国内資料の調査・検証とその分析を学習院アーカイブズにおいて実施した。『華族女学校規則』、『女教一斑』及び『式事録』の

資料を閲覧し、教育理念とともに体育・スポーツに関する記述部分を抽出する作業を行った。英米への実地調査では、研究代表者はイギリスの英国公文書館を中心に、研究分担者は津田梅子の留学先であったアメリカのプリンマー大学において資料収集を行った。さらに、両者とも「国際クーベルタン委員会主催シンポジウム」(2014年1月開催・於ローザンヌ)に出席し近代に入ってから女性のスポーツの動向を近代オリンピック史の視点から考察し日本への影響を検討した。

(2)平成26年度においては、研究代表者は、学習院アーカイブズにおいて、昨年に引き続き、アーキビストである桑尾光太郎氏の協力を得て、『女教一斑』『式事録』の内容をさらに精査した。これによって、華族女学校を含む日本のこの時代の女子教育に、イギリスのエリザベス・フィリップ・フューズ(Elizabeth Phillip Hughes)の来日が影響していることや、『女教一斑』の記述から華族女学校における彼女の演説の記録が発見されたことによって、新たな実施調査の課題を見出した。これを受けて、研究代表者のイギリスへの現地調査は、エリザベス・フィリップ・フューズが校長を務めた旧ケンブリッジ・トレーニング・カレッジ(The Cambridge training College for Women Teachers)である、現ヒューズ・ホール(Hughes Hall)を対象に実施し、担当者との面談とともに資料収集等を行った。

研究分担者は、米国の私立女子大学の対照群として、公立女子大学の中でも先導的取り組みをしてきたノースカロライナ女子大学(州立North Carolina Women's College)の女子体育指導者の調査を行った。当該大学は1920～70年代、女子体育の研究において優れた女性リーダーを輩出したことで知られている。

(3)平成27年度においては、研究代表者は、引き続き、国内資料の検証を学習院アーカイブズにおいて行った。『式事録』の第1

号～第 24 号の点検作業を実施し、体操授業や運動会の内容が次第に明らかになり、画像データを作成するに至った。また、チェルトナム・レディース・カレッジを再訪し、華族女学校学監であった下田歌子とチェルトナム・レディース・カレッジの創設者であるドロシー・ビール (Dorothea Beale) との書簡 (複写) を入手した。

研究分担者は、20 世紀初めの女性スポーツとリーダーシップ教育の先駆けとなった名門女子大 (セブンシスターズ) を先導した英国人指導者 C.M. アップルビーの資料を入手することによって、従来外部に知られることがなかった女性スポーツ教育の内実が浮上し、「リベラル・アーツ教育と専門教育」の両面から、全米に及ぼした影響を調査し、日本の女性スポーツ教育が諸外国から受けた影響を相対化することが可能になった。

(4) 最終年度の平成 28 年度においては、入手資料の総合的検討を行った。研究代表者は前年度までに検証した『例記録』や『女教一斑』に加え、新たに『式事録』(学校行事記録)、『学習院女学部沿革志稿 5・抄録』(細川潤次郎による第 1 回運動会時講話収録資料) の 2 点を入手し、運動会開催の趣旨や具体的なプログラムを検証した。

研究分担者は、米国女子大学のウェルズリー大学が設立した「Hygiene and Physical Education(1909～)」学部の指導者 (A.M. ホーマンズらの果たした役割) および、当該学部の出身者が、州立ノースカロライナ大学をはじめとする全米の女性スポーツ教育の展開に尽力した指導的役割を検討した。

さらに新たな国内資料の調査・検証とその分析を行った。英・米における調査対象大学への現地調査の実施については、研究代表者は、昨年に引き続きイギリスのチェルトナム・レディース・カレッジのアーカイブズを訪問し、1854 年～1916 年までの当該カレッジで実施されていたスポーツ種目の記録

(「Sport at The Cheltenham Ladies' College」) を入手した。研究分担者は、女性スポーツ教育の全米への拡がり、津田塾大学の健康/身体/レクリエーション教育に導入された経緯を検討した。

以上 4 年間の研究成果から、近代日本における華族女学校及び女子英語塾とその教育に携わった人々が、先駆的で啓蒙的な女性スポーツ教育の展開を図ってきたことが確認された。また、欧米からの女子教育の影響を受けてそれが現代の女性スポーツ文化の国際的な拡がりの源流となったであろうことは容易に推測することができる。特に津田梅子が影響を受けた欧米の全人的な女性教育は現代日本の女性リーダー育成の先駆けとなった。溢れ出る資料をより精査し、グローバル化への繋がりを具体的に検証することを今後の課題としたい。本研究で明らかにした内容を要約して以下に示す。

(研究代表者)

細川潤次郎の女子教育観

1893 年(明治 26 年)に華族女学校の第 4 代校長に就任した細川潤次郎の基本的な教育方針は徳育と体育の重視であった。また、「恵まれた境遇より生じる弊害に着目し、機会あるごとにそれらの点を指摘して警戒と指導を与え、いわゆる貴族上流の完全な婦人であると同時に、一般夫人として非常の場合にも遅れをとることがないように訓示している」とされ、特に体育を奨励した。細川は、「体操」の時間数を増やすとともに、1894 年(明治 27 年)11 月、体育振興の一環として第 1 回運動会を開催した。このような細川の女子教育観・体育観あるいは体操教育理念については、その講話や訓示を収録した『女教一斑』に記されている。また、教科としての体育についても、「近時教育家が体育をもって智育徳育と並称するは、運動遊戯が単に体育に止まらず、又以て智徳を涵養するに資すること大なるを以てなるべし」と述べ、細川の全人

的あるいは西欧的な体育観がうかがえる。

また、『女教一斑』第五編(明治33年4月)には、学監兼教授であった下田歌子が緒言を執筆しているが、細川の教育方針による体育の成果を突起している。

華族女学校の運動会の開催

華族女学校の運動会は、先に述べたように1894年(明治27年)11月19日に第1回が開催された。その後、年々盛んになり1897年(明治30年)からは春と秋の年2回開催されるようになった。女子の運動への理解の乏しい時代においては画期的なことであった。翌年からは、皇后や皇太子妃の行啓及び、皇族・外交官・教育関係者の参観をみることとなり盛況となった。第1回運動会は遊戯・ポロネーズ・毬拾・花取など学年に応じた種目で構成されていた。時に2000人の来場者があり盛會を極めた。すでに運動会が一般の学校行事になりつつあった当時ではあったが、華族女学校の運動会は皇后の行啓を伴う行事であったこともあり毎回新聞に掲載され注目された。

下田歌子の教育観と英国視察

下田歌子は、1895年(明治28年)、皇女教育を学ぶためにイギリスのチェルトナム・レディース・カレッジを訪問した。校長であったドロシー・ピールとの5通の書簡においては特にスポーツ教育内容について言及されていない。しかし、下田の考案とされる「女袴」は、指貫を施して活発で動きやすいものとなって運動会などで活用され、他の女学校にも影響を与えた。華族女学校の身体運動文化は、現代日本における女性のスポーツ文化の国際的広がりを予感していたかのように活発に繰り広げられていたと言える。

(研究分担者)

津田梅子と建学を支援したトマス

梅子の願いは「男性と女性の真の共生の実現」である。その建学の精神は、all-round women(まったき女性)の育成、すなわち、

専門的知識をもつだけでなく、女性にも男性と同じように「人間として」調和がとれ、高い志をもって世界をひらくことのできる自立した女性の育成である。梅子が影響を受け、高い信頼を置いていたのは、二度目の留学先であるプリンマー大学の第2代学長M. ケアリ・トマス(以下、トマス)である。トマスは全米でもよく知られた教育者であり、フェミニストである。特記すべきは、1900年、女子英学塾の創設される前から、梅子の私塾を募金活動によって支援するスカラシップ委員会が、梅子の提案で発足し、日本から精鋭の女子奨学生を送り出していることである。宗教的な団体によらず、梅子の建学の精神を理解する人びとから支援をとりつけ、国際的な支援のネットワークをつくり出す梅子の創造力が評価されている。

C.M.K.アップルビーとトマスの協力

1900年、イギリスで、アップルビーがロンドンの教育展示場でハーバード大学のD. A. サージェント(人体計測学)の研究に出会い、翌年、ハーバード大学夏期セミナーに参加。クラスで米英女性の運動参加が議論になり、アップルビーは女子ホッケーを披露。ヴァッサー大学の女性リーダーが大きな関心を示し、毎秋、セブン・シスターズのヴァッサー、ウェルズリー、スミス、プリンマー大学等への訪米指導が始まる。その後、トマスがプリンマー大学にアップルビーを採用(1904)。1907年、アップルビーは全米初の女子フィールドホッケー協会をフィラデルフィアに開設。1909年に、プリンマー大にHealth(健康)部門を設置し、トマスと協力して学生の競技参加を推進する。虚弱な肉体を改善し、女性にも仲間との協力(社会性)が大切とチームワークの意味を力説するとともに、ヨーロッパの事情に精通していたトマスの助言でウォーターポロを開講。「全人的な女性」の育成を目指し、必修科目として時間割に組むことをトマスに提案した(後に津田塾に影響)。

日本の女性スポーツ教育：津田塾大学
創立4年目の1904年、専門学校令による女子英学塾認可時の規則に体操（体操及び遊戯）が置かれ、1905年、体操場が新築落成。1910年、五番町（現在の千代田区）麹町の手狭な校地の裏にはテニスコートが一面つくられていた。梅子自身も少女時代（在米中）にクロッカー、テニスなどを好んで行っていたと伝えられているが、関東大震災（1923）で五番町の校舎が全焼。欧米をモデルにした女性のスポーツ教育が活発に展開されるのは、現在の小平市のキャンパスに移転後（1931年）である。1917年梅子の療養、1919年梅子の辞意表明、1929年梅子の死去（64歳）により、第二代星野あい学長（BMC留学、1906-12 奨学生）が梅子の遺志を継いで建学の精神を推進する。星野は女子体育の指導者にふさわしい人物として、1934年に津田塾を卒業した村井（旧姓中島）孝子に白羽の矢を立てた。1937年、北米州立オレゴン大学で研鑽を積んだ村井が津田塾に復帰し、様々な試行を始める。英国人教師によるフープなどを持ってするメダウ・ムーブメント、「姿勢教育」、「動きの教育」、芝生のグラウンドでのホッケー、プレイヤー、様々なスポーツやレク種目、東洋的身体の育成などの「余暇教育」、「健康教育」、「ウェルネス研究」からなる『健康余暇科学』が「全人教育」を支える必修科目として展開されていく。近代日本に受容された「先駆けとしての女性スポーツ教育」が、女性リーダー育成の事例から明らかになる。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計1件）

1) 山口順子、希望への意志と支え：ネイティブアメリカンの表現文化、津田塾大学ウェルネスセンター報告書、2016年12月27-44頁。
〔学会発表〕（計7件）

1) 荒井啓子、「華族女学校における体育・スポーツ教育の先駆的展開と下田歌子」日本臨床スポーツ栄養学会第6回大会、実践女子

大学、2016年10月22日

2) 荒井啓子、「華族女学校の体育奨励と運動会の開催 - 『華族女学校式事録』を手掛かりとして - 」日本スポーツとジェンダー学会第15回大会、東京女子体育大学、2016年7月3日

3) 荒井啓子、「『近代スポーツ』揺籃期と女性：社会・身体・文化の交差」日本スポーツとジェンダー学会第14回大会シンポジウム、明治大学、2015年7月4日

4) 荒井啓子、「華族女学校的女子教育とスポーツ教育理念 - 細川潤次郎の『女教一斑』を手がかりとして - 」日本スポーツとジェンダー学会第13回大会、中京大学、2014年6月29日

5) 荒井啓子、「華族女学校における初期の体育・スポーツ活動 - 現代日本の女性スポーツ文化の源流を探る」日本スポーツとジェンダー学会・春季研究交流会、長良川国際会議場、2014年3月13日

6) Junko Yamaguchi (2017) Emerging Sports Illuminate the Early College Sport for Women. The 45th International Association for the Philosophy of Sport, Whistler, BC, Canada, September 5-9. (2017.5.10.受付)

7) 山口順子「近現代日本の女性リーダー育成にみる欧米型身体教育の3つの条件」日本体育学会体育哲学専門領域研究会、明治大学駿河台キャンパス、2016年12月10日
〔図書〕（計1件）

1) 山崖俊子・山口順子共編著『健康教育：表現する身体』勁草書房、2015年4月15日

6. 研究組織

(1) 研究代表者
荒井 啓子 (ARAI, Keiko)
学習院女子大学・国際文化交流学部・教授
研究者番号：50082938

(2) 研究分担者
山口 順子 (YAMAGUCHI, Junko)
津田塾大学・学芸学部・名誉教授
研究者番号：70055325

(3) 研究協力者
桑尾光太郎 (KUWAO, Kotaro)
学習院アーカイブズ・職員